



Patsy Healey

**The Communicative Turn in Planning Theory and
its Implications for Spatial Strategy
Formation(1996)**

GAO YICHEN

東野 拓記

2014.12.18

Pasty Healey (1940~)



- イギリスプランナ、ニューカッスル大学Global Urban Research Unit (GURU) 名誉教授、ヨーロッパ都市計画大学連合 (AESOP) の元会長。
- 主な研究テーマ
 - ◆ プランニング理論研究
 - ◆ 都市地域の戦略的空間計画と都市再生政策

背景 (The Context)

- 社会的、空間的変容
 - ◆ 経済的、政治的秩序が大幅に変化 (ex. グローバル化やモビリティ化など)
 - ◆ 規則的・階層的な空間秩序 (spatial coherence) の崩壊、空間の断片化 (fragmentation)
 - ◆ 地域間関係の緊密化と地域内関係の緊張や衝突化が同時に存在。
 - ◆ 昔頼っていた模型や技術的な分析方法は適用されなくなる (models of land-value, gravity models)。
 - ◆ また、場所 (place) の品質は地域経済発展と環境保護の活動において重要になって来た。
- その結果、ユーロッパでは都市空間組織と空間戦略への関心が増えているが、やり方はまだ不明。
- そこで、public argumentation と communicative policy practice に関する新しいアイデアは、プランニング理論分野において、何かを提供することができる。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- **20世紀後半、都市計画分野に席卷した二つの思潮**
 - ◆ 道具的理性と地域経済学の理論を管理科学に導入
 - 技術的な分析を重視（都市システム動態のモデリング）
 - 1960年代と70年代、ラショナル・プランニングの熱狂時代の戦略計画方法論と制度の継承
 - ◆ 経済と政治関係の構造的変化の分析を通じて、都市地域経済の権力関係の実質を明らかにする。
- しかし、この二つの思潮はいろんな権力闘争を起こした。また、物的条件を重視し過ぎ、文化的多様性の位置づけに理解できていない。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- 多様性を重視する新しい思潮
 - ◆ 前提：我々は複雑な経済的社会的の関係網に居る異なる人間であることを認識すること。
 - ◆ 焦点（目的）：公共領域の議題について、協働体制を創り上げること。
- この思潮は多様な理論の影響を受けていたが、そのうちの重要な一つはHabermasによる研究。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

■ Habermas の理論

- ◆ 道具的理性、及び経済的、官僚的な権力による支配的利害を批判し、我々の認識と理解の幅を十分反映される公共領域（public realm）の再構築を心かけている。
 1. 私たちは自主的な個体ではない。自分自身や自己の利害への感覚は他者との関係及びコミュニケーションから形成するものである。自分自身、自己の利害、そして価値への考えは他者とのコミュニケーションとそれにまつわる協働作業を通じて社会的構成されている。
 2. コミュニケーション行為に隠される基準判断（normative judgment）がある。それは、人々が包括、誠実、合法と真実を目標として、お互い関連すべきことである。

Jürgen Habermas (1929~)
ドイツ哲学者

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- 包括的議論 (Inclusionary argumentation)
 - ◆ 政治的コミュニティのすべてのメンバーの貢献や認知、価値観などを受け入れ、認めることの意味が含まれている。
 - ◆ 包括的議論によって、新たな公共領域が構築されていた。それは、異なる議題と、議題をあげる多様な方法によって形成するもの。
 - ◆ このような条件の中、Habermasによる「より良き論拠」の力は、国家と資本の権力に対抗し、変革させることができる。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- この哲学の理念は、のちに様々な分野に影響を与えた
- **環境仲裁の場**：実践的な戦略として具現化された。
 - ◆ 人々が複雑な環境紛争に合意させる試みは、発散的な議論形式に導いた。
 - ◆ ゼロサム (zero-sum) → ゼロプラス (zero-plus)、利害のバランス → 付加価値。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- 人文科学（言語学）：discourseのデコンストラクション
 - ◆ 言語、芸術、及び音楽の背後に隠された価値や認識を明らかにする。
 - ◆ 言語を通じて隠された権力システムが伝えることができる。
- フェミニスト：社交(social intercourse)のデコンストラクション
 - ◆ 女性の社会的地位のカテゴリー化と周辺化（categorizing and marginalization）の深刻さを解明している。
 - ◆ また、道具的理性と新古典主義経済学の関連方式をハイライトし、競争行為と権力は衝突の元と強調している。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- これら思想は過去20年間で急速に発展し、さらに相互作用していた。
- プランニング分野：
 - ◆ 民主的、コラボレーティブなプランニング過程の研究
 - ◆ 「現代主義」的なラショナルプランニングと、「機能主義」的なソーシャルエンジニアリングを批判し、階級に基づいた都市政治経済学的な分析ではなく、多様性と差異性に重視する「ポストモダン」の概念を探る。
 - ◆ 計画議題に関する公的討議、ディスカッションの修辞形式、及び計画実践中の仮定などの背後に隠された権力関係を明らかにする。
- レビューアが最近これらの思想を、解釈的なアプローチ (interpretive approach)、或はコミュニケーティブアプローチ (communicative approach) と名付けられていた。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- 過去の研究の中から浮かび上がった戦略計画の新たな形式に関する重要なテーマ：
 1. どうやって計画事項の議論や討議の形式を区別する？
 - 既存権力関係と従来の問題に対する理解を強化するもの
 - 今の私たちの生活にもっと関係性のある、なおかつ公共領域を開放させ、「包括的議論」を実現する能力のあるやり方で、これらの関係を変革する可能性のあるもの
 2. 「包括的議論」を目指すなら、都市地域の共用スペースの多様性を考えると、どんな実践がこれを達成するには役立つか？そして、文化の差異をどうやって乗り越えてコミュニケーションを取るのか？
 3. 戦略的合意を形成、及び包括的議論を促進するための戦略発展には、どんな具体的な課題があるのか？どんな促進スキルが必要なのか？

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

- 新たな理念の中、プランニングの意味と方向性は：
 1. 相互作用的で解釈的な過程である。
 2. 多様で流動的な「討議コミュニティ」或は文化における試み。
 3. プランニングにおいては「敬意」を伴う対人的で文化交流的な討議の形式が要求され、公共領域における互いに話したいことへの認識及び価値評価の方法を探る。
 4. 焦点1：公的討議が起こり、アクションのプログラムが定置され、紛争が仲裁される舞台に置かれる。
 5. 焦点2：多様な政策要点をつくるための主張と、それらの主張を形成される異なる形式。

コミュニケーティブ議論による公共政策決定

6. 焦点3：再帰的で批判的な能力を発達させる。その能力は評価的、創造的の可能性を持って、何をする、どうするかに関するアイデアを生成する。また、多様なコミュニティメンバーの価値観への考査もできる。
7. 焦点4：できるだけ包括的な形式で戦略的討議を行う。
8. 参加者はこのようなプランニング討議を通じて、自分自身、お互いの関係性、自己の利害や価値、そして理解に関する新たなことを学ぶ。
9. この知識を生かして、参加者は協働作業をしようとする。このように、包括的議論は、より良き論拠 (better argument)、及び観念、比喩、イメージ、ストーリーの力を通じて状況を転化させる力をもつ。
10. 将来をイメージングする活動のようなプランニングは、「目標を想像する (dreaming the destination)」よりも「変化の可能性を想像する (dreaming the possibility of change)」。即ち、所与の目標に向けてではなく、参加者が協働で旅の方位を定めながら進められるものである。

空間戦略形成のコミュニティアプローチ

- 前述の文献に基づいて、以下の5つの項目をまとめていた。
 - i. ディスカッションの場、コミュニティメンバーがそこにアクセスする方法
 - ii. ディスカッションのスタイル
 - iii. ディスカッションの過程で生じる問題、議論、クレーム、アイデアなどを整理、選別する方法
 - iv. 作られた戦略が、都市地域の空間的、環境的变化を管理する新たなdiscourseになる方法
 - v. 政治的コミュニティが合意する方法、そして継続的な批評のなかで合意を維持する方法
- 通常の計画プロセスと異なって、戦略計画過程の局面を反映するが、前後の序列関係は存在しない。むしろ、これらは政治的コミュニティが戦略計画の取り組む際、自分自身に問うべき問題である。

i議論のためのアリーナ

- 伝統的議論：政策決定の場は、正式な政治、行政と法律制度のアリーナと考えている——一部特権のある人しか議論に参加できない。
- 包括的議論：すべてのコミュニティメンバーに話す権利を与えなければならない。
 - ◆ 空間戦略形成の推進力は特定の制度環境から生じるもの
 - ◆ 一瞬なチャンス、権力関係の隙間、矛盾と衝突の状況が必要である。
- この段階では、一つ重要なのは、権力関係の隙間を見極め、違うことをやるチャンスを見つけ、その隙間を拡大して、変革のための可能性にする能力である。——戦略的見直しの機会を認識する

i議論のためのアリーナ

- 討議を行うアリーナを設ける場所
 - ◆ 一つの可能性は、既存の組織的なアレンジメント（organizational arrangements）を利用する——狭い範囲内の利害関係のコントロールから解放することは困難である。
 - ◆ 別の戦略としては、コミュニティを動員するための新たなアレンジメントを構築することである。

i議論のためのアリーナ

■ コミュニティの定義

- ◆ 伝統的なplace-basedなゲマインシャフト（Gemeinschaft）ではない

Gemeinschaft——共同体組織

- ドイツ学者フェルディナント・テンニースが提唱した概念。
- 地縁、血縁、友情などにより自然発生した有機的な社会団体。
- それと対象の概念：Gesellschaft——機能体組織/利益社会

- ◆ 二つの意味を持つ

1. Spatially based：同じ場所において、そこに起こることに関心を共有する人の集まり。
2. Stake based：一つ目のコミュニティにいる人のやることに興味或は関心を持っている人の集まり。

- 包括的戦略計画においては、この二つのコミュニティを同時に考える必要がある

i議論のためのアリーナ

- 議題にかかわる利害関係者を調査する（mapping）のは戦略的計画プロセスにおいて、重要なことである。
- **倫理的挑戦**：政治的コミュニティメンバーは、どんなアリーナが好む、或はどのような利害関係者があるの結論を出す前に、議論が始まってしまう。その結果、一部の人は最初の行動に責任をとる必要がある。
- 包括的、民主的な行動と、権力層の支配を定着させる行動を区別する二つのアイデア
 - ◆ 包括的倫理（inclusionary ethic）：分配の公正（誰でも同等の地位を持つ）→多様性への認識（すべてのグループは意見を述べる同等の権限がある）
 - ◆ アリーナのシフト——時期によって、アリーナを使い分ける：Bryson & Crosby（1992）は、政策イノベーションは三つの場を巡って進行していると主張した。
 - フォーラム：戦略的な価値や方向性を明確にされる場
 - アリーナ：政策はより正しく定義され、特定のプログラムに変換される場
 - コート：未解決の紛争を明確にされる場

ii *discourse*の範囲と形式

「何を、どのように議論するか」

- 伝統的議論においては
 - ◆ 何が起きていて (what is going on) : 現状
 - ◆ 何が問題か (what the issues are) : 課題を調査する段階だったが、
- 包括的議論においては
 - ◆ 問題が違う立場の人にとってはどういう意味を持ち
 - ◆ 問題が意図したところであるのかそうでないのかを打ち明ける段階である

ii *discourse*の範囲と形式

- 相互の関心を理解する事につながる重要で繊細な作業
- 都市地域での包括的な議論は、政治的コミュニティにおける文化的違いだけでなく、その問題自体が
 - ◆ 何が人を悩ませ、その原因は何で
 - ◆ それに対して何ができるのかという2つの事の関係性を難しくしてしまう

そのため、

間違った理解をしてしまう危険性がある

ii *discourse*の範囲と形式

- 3つの側面がここでは重要

① style

Collective discourseには様々な形式があり得る

- ◆ 人々が彼ら自身をどのように準備し
- ◆ 場をどのようにアレンジし
- ◆ 誰が、いつ、どのように話をし
- ◆ どのように議論が決着するのか

形式を選択して活発に議論するが、

→ 全員がその形式において快適ではないということ認識するしなければならない

ii *discourse*の範囲と形式

② language

参加者は互いに尊敬し合い、全員にスペースが与えられるようなルールに従うが、まだ互いに違った表現方法を用いて話をしている。

この違いは単にメタファーや比喩の問題ではない

- ◆ ある映像がある文化にとっては特別な意味を持って、他の文化にとっては奇妙なものでしかない
- ◆ ある話者の皮肉で曖昧な表現を受け入れられる者もいれば、完全に受け付けない者もいる

→そのような差異を全て受け入れて、しかしその上で解釈が必要となり interculturalなコミュニケーションには限界があるということを経験する必要がある

ii *discourse*の範囲と形式

③not present members call into presence

どれだけ精力的に発言の機会を設けても、一部の人間が他の人間より活発に関わり、議論を形成するにおいて重要な役割を持つようになり、議論を分析し、戦略的なdiscourseを発展させるようになる。

しかしそれは、他の人が排除されることと同じ意味ではなく、どのような会話においても一部の人は存在はするが、表現ができないということがある

→包括的議論においては、ある理由により“not present”なメンバーにたいして尊敬と理解を十分に示す必要がある

→“not present”なメンバーを議論からabsent（欠席）させてはならない

iii 論点の選別

- 包括的議論を行うと、注目すべき問題が膨大に出てくる。
- 事実、価値、焦点に対する主張、懸念、結果、大惨事を引き起こす災害についての言及がなされ、その記録は混乱させる。
- しかし、更にそれらは単なる言及ではなく、
 - ◆ 話者が事象にたいしてどのように感じたか、
 - ◆ 誰が最も関係するのか、
 - ◆ 誰に聞こうとしたのかも含まれる。

→どのようにポイントを作り、話を作るかが、話者がどのように事象を捉えたかや、周囲を取り巻く権力関係や、使う言語について、人々に伝えることとなる。

iii 論点の選別

- 伝統的議論の過程においては
 - 一部の人間、技術的な作法によって行われ、そしてそれはほぼ即時的に行われる
- 包括的議論の過程においては
 - 分析はより豊富で、幅広くなされる必要がある
 - ＝単なる技術的で抽象的な作業ではなく、相互に議論を分析し合い、可能性について学ぶアクティブな作業である
 - ＝問題や状況変化を理解するだけでなく、道徳的・美学的な観点から何を価値付けし、価値はどのように影響されるのかということを理解する事を含む

iii 論点の選別

- 包括的なアプローチ

人々がお互いに理解し合う時間を持った後で、考えを組織化することを要求する。

そのため、

- ◆ いつ議論をより形式的に選別し始めるのか
- ◆ いつ物事への様々な視点の把握から、共通のthreads（糸）を導くのか

ということが重要となる

iv 新しいdiscourseを創る

- Abercorombie によるLondonの計画、HallによるSouth-east Englandの計画などにおいては、“by planners for planners”で計画は創られた
 - collaborative, discursive processにおいてはどのようにして戦略が生まれるのだろうか
 - ◆ 問題や活動の目標、結果（活動のコストと便益）を測る方法における差異を合意に至らせる能力が必要
 - ◆ 活動や活動により達成できる事のありうる過程をcollectiveに想像するという芸当にも相当する
- 複数ある可能性の中から選択し、その選択した戦略を磨き上げる事をコラボラティブに努力する（起源の分配と権力の関係性、と、一般の理解、において）
- 選別のプロセスとdiscourseの創出は相互作用的である

iv 新しいdiscourseを創る

- 政策のdiscourseを発達させる方法
 - ◆ 新しい理解やコンセプトの重要性
 - それによって議論が一つの概念から他の概念へとシフトする
 - ◆ 違うストーリーラインを探る
 - 包括的なアプローチは何が出来たのかに対してだけでなく、何が達成されないのか、それは何故なのか、コストはどのくらいなのか、という事にも注意を払う
 - ◆ 利害関係者をチェックする

v 合意と批判

- 包括的なdiscourseは可能な限り多くの市民に対して利益をもたらすが、幸せでない人、議論では解決できないような問題を抱える人はどんなときでもいる
- 問題や反対・批判に対処するような公平な道を提供する必要がある。
 - それらがどのように公表されるのかを最初の段階で取り決めて、
 - それらを議論する形態というものに注意を払う必要がある
- 包括的アプローチにおいては批判する権利というのが本質的な部分である（権利というよりはもはや義務のようなもの）

v 合意と批評

- discourseは社会的関係性や思考・行動の枠組み、公共の投資などに影響を与えるが、この枠組みを作るという役割は、戦略や要素の選択の意図の継続的な再解釈も含む

↑

時が過ぎれば状況が変化し、解釈的な変化というものが不可避に起こる

- このため政策のdiscourseは継続的で柔軟な批判にさらされる必要がある
 - ◆ 戦略が意味あるものなのかどうか
 - ◆ コミュニティのメンバーに役割を提供するのかどうか
 - ◆ 新しいストーリーラインが表れるかどうか
 - ◆ 昔同様に包括的なのか

v 合意と批評

- パラメータを操作可能な状態 (alive and in the open) にしておけば、

コミュニティのメンバーが変化が必要だと感じ始めたときに、より柔軟に対応する事ができる

vi 結論

- 伝統的な空間戦略における計画の役割は、空間的な秩序をつくることとされてきた。

そしてそれは、“公共の関心”の目標を達成するようデザインされた技術的な分析や評価という合理的手法により支えられてきた。

- しかし20世紀の後半になり、役割が環境紛争を治めること等に変化してきた。

- この論文で示したアプローチは、戦略的なdiscourseの構築や合意形成におけるコミュニティーの協働を促すプロセスとしての戦略的空間計画を表す。

vi 結論

- 包括的アプローチはいくつかの点でCRPの活動と同じである
 - ◆ 調査 (survey)
 - ◆ 分析 (analysis)
 - ◆ 評価 (evaluation)
 - ◆ 戦略の選択 (choice of strategy)
 - ◆ 見直し (monitoring)
- しかしこれらの活動は、CRPとは全く違う方法でアプローチされる
 - 相互作用的に行われる、つまり連続して（順序を追って）、というよりはむしろしばし同時並行で行われる

1. 議論のためのアリーナ

- ◆ 戦略的な見直しの機会を掴む
- ◆ アリーナを設ける
- ◆ 包括的倫理を採用する

2. 議論の範囲と形式

- ◆ 包括的な形式の選択する
- ◆ 多様な言語を用いる
- ◆ non present membersの存在を考慮する

3. 議論の選別

- ◆ 事実・価値・権利を認識する
- ◆ 違う視点を把握する
- ◆ 共通の糸を導く

4. 新しいdiscourseを創る

- ◆ discourse keyを使用する
- ◆ 違うstorylineを探る
- ◆ 利害関係者をチェックする
- ◆ 戦略において何が無視され、それは何故なのか、ということを確認する

5. 合意と批判

- ◆ 最初の段階で紛争解決へのアプローチを発展させる
- ◆ 合意のポジションに対してチャレンジする権利を与える
- ◆ そのようなチャレンジを補うための原理を採用する
- ◆ 合意への規則正しい柔軟なチャレンジの機会を作る

vi 結論

- 包括的アプローチは、他の戦略的空間戦略にたいするアプローチと同様に、一般的な計画、つまりより良い方法において戦略的空間戦略についてどのように行っていくかについての考えについて示されたものである。

しかし、

特別なプロセスとまではいかないが、政治的コミュニティが独自のプロセスを作る手助けとなりうる

- 包括的な倫理によって、他のアプローチと比べて、意見や影響が利害関係者間においてより平等に分配される。

vi 結論

- 多くの人は包括的なアプローチを現時点ではやや根本的で、理想的すぎる、としている
- 環境の危機や経済の衰退を考慮すると、最低限安全かつ無事に事を運んでくれる事を望み、仮に民主主義的、オープンな社会でなくとも、順序分けされた技術的な慣習に頼る事になる
- しかし、合意を形成するという作業は行われ始めている。計画のコミュニティは、戦略的な議論に関わる専門家や計画実践に反映する学者の集まりとして、精力的な議論や現在行われているアプローチの形式や手法の調査に参加する必要がある

vi 結論

- 包括的なアプローチはコミュニティーのメンバーの積極的な関与を求めるが、それは手法としてはかなり複雑なものである。
 - ◆ 現象間の繋がりを見る事は難しい
 - ◆ 違う立場の知識の含意はより明確にする必要がある
 - ◆ Non presentをpresenceにするには積極的な認知が必要となる
- これら全ては、都市や地域の変化のプロセス、コラボティブな戦略的合意形成のプロセスに関する知識のある専門家によって、助けられる。が、これらすべてのプロセスにおいて役立つには専門家はプロセスについてより多くの事を知らなければならない
- 将来においてこの作業の専門家を育てる事が、計画理論や計画教育において重要なタスクである